



前編

近代スピリチュアリズム百年史



はしがき

近代スピリチュアリズムは、一八四八年、アメリカのニューヨーク州ハイズビルの一労働者の家庭から発生しました。以来、これは世界の各地に燃え拡がり、続々と心靈現象の発生をみたのです。この現象は事実であるところから、ここに新しい科学（心靈科学）の誕生となり、後には、これらの現象には哲学的意味があり、ひるがえっては宗教的内容をもつことが明らかとなりました。

その宗教的教えは、霊媒の霊交を通じて、神や人間の運命や道義などについての霊示という形で伝えられました。その教えは、従来の宗教の信仰とは、非常に違っているのです、これを普及するには別の組織機関が必要だということが分かり、ここに、次第にスピリチュアリズム運動の展開をみるに至ったのです。

スピリチュアリズム運動は、本質的には宗教的な運動です。また、その根本が内的な霊の黙示によるものであり、形式にとらわれた既成宗教とは、この点で大いに異なるものがあります。

スピリチュアリズムは宗教の一派ではなく、真実の宗教そのものです。つまり、そこにはあらゆる宗教の大事な要素が、事実として存在しているのです。たとえば、靈魂の不滅や霊界の存在にしろ、それはもはや信仰ではなく、事実ということになったのです。このように既成宗教の信仰的な行き方に対し、近代スピリチュアリズムの事実に基づいた行き方の違いがわかれば、この百年間に世界でいっ

たいどんな重大な変化が起こったか、これが十分にご理解いただけられるでしょう。

この両者の根本的な相違とはいったい何でしょうか。元来、宗教はいずれも神の観念がその原理の中心となっています。しかしながら、この神の観念は、他の人間思想と同じように変化してゆき、遂に、甚だ人間じみた観念になってしまいました。それとともに、人間の生活環境も高度化していききました。スピリチュアリズムでは、神とは生命を賦与する原理、また力であると考えます。従って神とは、一切の自然現象の中に顕現するものであり、また、宇宙の内部に在る永遠無限の霊であります。

それ故に、自然現象とは絶えず神が、私たちにその存在を証しつつあるものであり、神なる霊が働きつつあることの証しです。このように、自然現象の中に自己を顕すので、私たちは直接に誰でも神に触れることができます。

つまり、神は私たちの内部に在り、また他の存在するあらゆるものの内部にも在ります。こうして、私たちは大自然の法則を学ぶことによって神が何であるかを理解し、更に神に完全に従うこともできるようになるのです。

キリスト教では、神を擬人的に考え、神が愛したり憎んだり、復讐ふくしゅうのために、人を殺したりするのですが、この点、スピリチュアリズムとは甚だ異なります。

アメリカの哲学者サンタヤナは、これについて次のように言っています。「宗教はいずれをみても、その動機は甚だ低級で、悲しみや憂うつの気持ちから出発しており、まことに情けなくなる。供物を捧げたり、もてはやしたり、盲目的に従うことが、神の望み給う名誉であると考え、それに応じて、愛と罰とが下ると考えたのである。」と。

宗教における二番目に重要な原理は、四海同胞の観念です。スピリチュアリズムでは、生者も死者もすべてこれ兄弟であるという観念を、ありのまま事実として認めています。私たちは日頃、霊界の霊達と愛情にみちた交通連絡を行いながら、この事実を握っていくのですが、この点、キリスト教は頭からこれを非難して、霊交は聖書の示すところにより、悪魔のしわざであるというのです。

しかし、私たちが日頃、霊と交通し、霊の支配をうけることは現実の事実です。それによって、生者であれ死者であれ、その生活の上に多大な影響が及ぶものです。実際に私たちは、霊からの指導をうけて、日頃いろいろ助けられています。また一方では、交霊会にふらふら出てくる無自覚な霊達は、私たちの指導によって幸福な境涯へと進んでいったりしています。生者と死者とが互いに愛しあうことは、聖書が何と教えようと事実なのです。

人間の霊魂が死後存続することは、今や事実です。敏感者はこれをよく感じることができますし、普通人の私達にしても、霊魂の物質化現象によって、五官をもってこれをよく確認することができます。

心霊の事実は今や一般人に認められてきています。しかるに、キリスト教では今なお、二千年も昔の一人の人間の経験を、それも途中でやめられた言葉に従って、そこに永生の希望を託しているのです。しかも、そのキリストの言葉たるや、実に彼の復活以後相当の年数を経て、はじめて書かれたというしろものなのです。

スピリチュアリズムでは、私たちの思想や行為の一切は、自己にその責任があることを信じます。キリスト教とスピリチュアリズムの顕著な相違点は、実はこの点にあります。すでに死の関門を通つ

た霊達にきいてみますと、彼等の死後の生活では、人間の霊的な進歩は、本人の努力いかんにのみかかる、異口同音に申します。また自分の犯した罪は、救世主の犠牲によるつくないをもつてしても、消えるものではないと告げています。

イエスの肉であるパンを食べ、血であるブドウ酒を飲むという、今なおこんな儀式を保持していますが、これなども一人の人間イエスの死による犠牲を信じ、あくまでも自己責任の原理を否定しようとするものであります。

地上での私たちの行いに対し因果応報があるということは、私たちが実際に死後他界へ行った時、初めて霊界の法則によつてはつきりそれが示されます。この法則によれば、向上した靈魂は、美しい幸福な高い波長の境涯に入ります。

この点、地上の状態とは根本的な相違があるわけです。地上では賢愚、善悪いずれの人も、その住む所は一つです。上述の法則は、実際に霊界にある靈魂達の実情に基づいて、たてられたものです。これに反してキリスト教では、教会設立者達の考えに従い、人間じみた神エホバが審判をするという信仰を、そのままとり入れてにすぎないのです。

次にスピリチュアリズムでは、すべての人が進歩向上するという原理をとりいれています。キリスト教は、スピリチュアリズムを否定しますが、もしそうなら、不可知論者のような人に対して、人間は霊であつて、どこまでも進歩向上するのだということについて、一体どういうふうの説明するのでしょうか。もしこの事実を認めさせられなければ、人はもはや、どんな仕事もまじめにやろうとはしないでしよう。つまり、私たちが何をやっても結局は意味がないとすれば、自分の生命とは、実にくだ

らないということになりますからね。

結局、スピリチュアリズムとは何か。それはかのスピリチュアリズム七綱領を要約してみればわかります。すなわちそれは、他者への奉仕、これです。これによつて私たちの生活は、利己から利他へ、個人主義から協同主義へと転換されていくのです。

この立場においてこそ、はじめて、愛と真理が、その他のもろもろの靈的な尊嚴なものが、その存在の意義をあらわすのです。

本書は、イギリスの「全国スピリチュアリスト連合」の国民教育計画のためのテキストです。従つて、学習とグループ討議に便利なように、講義調で項目別に分けて書きました。本書は一八四八年から一九四八年にわたる、百年間の「スピリチュアリズム運動」の要約史であります。

一九四八年 マンチェスターにて

「ツール・ワールズ」誌 編集長

アーネスト・トンプソン